

ブリコラージュハウス

- まちの断片を集積した小児ホスピス -

1150045 川村昂大

1. はじめに

現在、障害や疾患をもって生まれてくる子どもは年々増加している。その主な要因として、医療の発達や晩婚化による高齢出産が挙げられる。しかし、現在のわが国では母親への負担が大きいことや、経済的な負担、そして子どもを預かる施設や体制が整っておらず、安心して子どもを産み、育てる事ができる環境がもためられている。

そこで本設計では子育て期における「子ども」と「親」のための施設を提案する。

2. 小児ホスピス

イギリスでは 1989 年に世界で初めて小児ホスピスが開設され、現在では 40 以上の施設があり、ヨーロッパのほかの国や、カナダ、オーストラリアなどに広がっている。

しかし、我が国は 2012 年に初めて小児ホスピスが開設されたが、現在あるのは全国で2カ所のみとなっており、少子化問題を改善するためにも小児ホスピスの開設は重要になってくるものと思われる。

施設名	開設年	ベッド数	新築/改修
Helen House Children's Hospice	1982	8	新築
Martin House	1987	9	新築
Acorns Selly Oak	1988	10	新築
East Anglia's Children's Hospice(Milton)	1989	7	改修
East Anglia's Children's Hospice(Quidenham)	1991	6	改修
Francis House Children's Hospice	1991	7	新築
Rainbows Children's Hospice	1993	8	新築
Derian House	1993	9	新築
Zoe's Place - Baby Hospice	1995	6	改修
Children's Hospice South West	1995	8	新築
Hope House	1995	8	新築
Rachel House,CHAS	1996	8	新築
Brian House	1996	4	新築
Naomi House,Wessex Children's Hospice Trust	1997	10	新築
Little Haven Children's Hospice	1998	9	新築
Butterwick House Children's Hospice	1998	4	新築
Horizon House	1998	10	新築
Eden Valley Children's Hospice	1998	2	新築
Demelza House	1998	8	新築
Claire House	1998	6	新築
The Donna Louise Trust Children's Hospice	1999	8	新築
Ty Hafan Children's Hospice	1999	10	新築
East Anglia's Children's Hospice(Ipswich)	1999	4	新築
Acorns Walsall	1999	11	新築
Keech Cottage Children's Hospice	2000	5	新築
CHASE Children's Hospice	2001	9	新築
St Andrew's Hospice Child and Adolescent Unit	2001	4	新築
Richard House Children's Hospice	2002	8	新築
St.Oswald's Children's Unit	2003	8	新築

fig1. イギリス国内施設一覧表

3. 方針

本設計の方針として、「子どもたちを『まち』から孤立させない」を挙げる。ホスピスの機能に加え、公園の機能を与えることで、放課後や休日に遊びに来るまちの子どもたちや大人たちと触れ合う機会が増える。

4. コンセプト

私たちが住むまちのなかには様々な要素を持つ空間が溢れている。私が幼い頃にそうであったように、大人からすると何気ない空間も子どもたちにとっては魅力的で冒険心を駆り立てるような空間に感じることがあるであろう。それらの「まちの断片」を集積し、建築をつくりあげる。



figs2. まちの断片

まちの断片をその形のまま建築に反映するのではなく、要素を抽出して集積させる。例としては、橋の下は「暗い」、「低い」、「水の音」、「段差」といった要素が含まれている。

まちの断片を集積することによって多くの子どもの遊び(行動)を許容できる空間が生まれ、施設面に関しては、病院のような単純な空間ではなく、まちのような多様で複雑な配置により、刺激のある生活を送ることができる。

ホスピスの機能に加え、公園の機能を設けるが、遊具は一切設置せず、建築自体が遊具の役割を代用しているような空間を目指す。



fig3. まちの断片の要素

5. 計画地



figs4. 計画地写真

計画地は高知市中久万。子どもたちをまちから孤立させないという方針のもと、交通の便が良く、ある程度周辺に住宅がある敷地を選定した。

川の合流地点に位置し、中心市街地でありながらも自然が感じられる立地条件であり、V字になっている前面道路はほぼ車の通行がなく安全である。

堤防から階段で川に降りることができるため、遊びの幅も広がる。

6. プログラム

・ターミナルケア

終末期ケア。数週ないしは数ヶ月のうちに死亡が予想される治癒の望みのない末期患者に対して、治療でなくケア（看護）を重点的に行おうとする医療のあり方。

・レスパイトケア

乳幼児や障害児、高齢者などを在宅でケアしている家族を癒すために一時的にケアを代替し、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービス。

・グリーンケア

子どもを亡くした親の悲嘆をできるだけ取り除くために支援するケア。定期的に集会などを開き親同士で悲しみを分かち合う。

居住部門 -

子どもの居室が計 10 室あり、うち 2 室はきょうだいで使用できる部屋とする。常に 8 室が使用され、残り 2 室は緊急時などの際に使用する。

共用部門 -

3 ~ 4 室あたりに 1 室ずつプレイルームを設ける。集会室では定期的にイベントやボランティアなどの活動も行える。

管理部門 -

スタッフが常駐するスタッフルームと日中のみ滞在するスタッフコーナーを設け、常に子どもたちの状況が把握できるようにする。

7. ダイアグラム

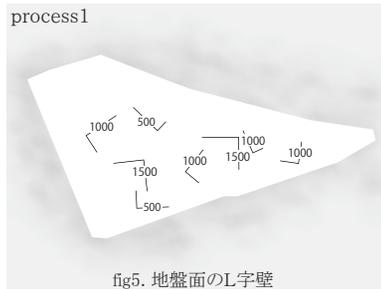


fig5. 地盤面のL字壁

最初におおよそのゾーニングを行った後、ランダムに高さ 1500mm、1000mm、500mmのL字壁を配置する。



fig6. 起伏の形状

L字壁をもとに、3つの島ができるように起伏を付けていく。様々な勾配の斜面を作り出すことで谷や段差が生まれる。



fig7.L字壁の配置

再びゾーニングを行った後、壁の長さや傾きを調整しながらL字壁を配置していく。その後、壁の高さを決めていく。

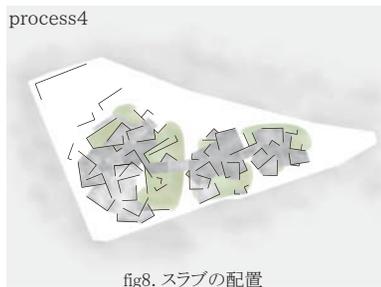


fig8. スラブの配置

床スラブをのせていく。起伏を削って壁が埋まるようになる箇所やそのまま起伏から張り出す箇所など多様に配置する。

8. ディテール



figs9. 躯体と起伏のディテール

ランダムに構成された起伏に対して 3 パターンの躯体の載せ方を振り分け、床レベルの高さに変化が生じる。この際の変化が 2Fスラブや屋根にまで反映することで、まちのような複雑な構造が完成する。